

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 日置節子

所属: 大阪府立寝屋川支援学校

記録日: 2019 年 2 月 10 日

キーワード: コミュニケーション

表現 発語

【対象児の情報】

・学年 小学部1年 女児

・障害名 知的障がいを伴う自閉スペクトラム症

・障害と困難の内容

●コミュニケーションへの意欲は高いが、聞いて理解できる言葉に対して、表出して伝えることができる内容が極端に少ない。

●言葉の3音以上が記憶されにくい。音声模倣を促されると、最後の1音の模倣になる。

●表出できる言語は、対人的な言葉が主で単語程度。

●太田ステージ III-1 (6月実施)

提示された6種のイラストから、「書く物はどれですか?」「乗る物はどれですか?」などの物の用途を問われ、「鉛筆」「三輪車」のイラストを正しく指差して答えることができる。

●療育手帳 A

【活動目的】

・当初のねらい

(1) 身の回りにある自分と関わりの深い事物(人・場所・物・学習内容など)と言葉を覚えて、大人と、身振り・言葉・写真カード・VOCA などを使って伝え合いができる。

(2) クラスの友達と手と手を合わせたり、名前を呼びあったりできる。

・実施期間 2018年5月～2019年2月9日

・実施者 日置節子

・実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

(言葉の理解について)

・馴染みのある単語、人の名前、次の行動などの言葉を聞いて理解できる。また、視覚的な情報(写真・画像・イラスト)を添えられると理解が進みやすい。

(言葉の表出について)

・活動の場で、気になる事物に近づき、「てー(貸して)」と言ったり、指差ししたりして大人に伝えることが多い。「○○したい?」など尋ね返されると「うん(肯定)」「やーや(拒否)」などの伝え合いができる。

・言葉を発した場合でも発音が不明瞭なために、伝えようとしていることを理解するには、本児の生活のパターンや興味の所在を把握している必要がある。

・物の名前など、言葉を聞いて理解できる単語でも、「これは何?」と問われると、言葉にすることが難しい。言葉の音とイメージがおぼろげで、自らの言葉として表出できるまでの理解ではないと思われる。

(得意とする動作模倣について)

・行動観察から、本児は「動作模倣が得意」ということがわかった。また、自分なりの身振りを使って伝えようとする様子も見られるため、身振りやサインを言葉に加えて取り組むこととした。

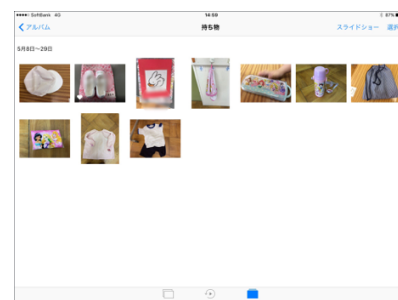
・活動の具体的内容

①持ち物の言葉を覚える学習 <5月より>

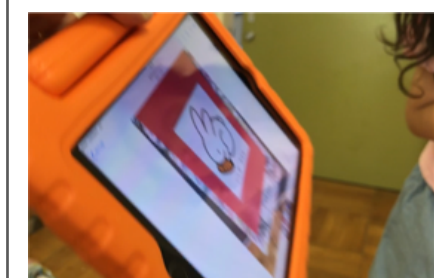
- ・取り組み時間：登下校時のカバンの片付け、着替えの時間（週に3回程度）
- ・アプリ：写真

対象児のカバンやロッカーの中にある物を1つずつ写真に撮って
おいた。対象児は、それらをiPadで見ながら、担任が話す言葉を聞い
たり、音声を模倣したりする活動を繰り返した。（右写真）

例えば「連絡帳」という言葉では、連絡帳の写真を見ながら、「れんらくちょう」という言葉を聞き、「ちょー」と語尾を模倣することから始めた。この時担任は、四角い形を空に描くサインを添え、対象児が写真を見ながら言葉を音声模倣することに加えて、サインを見ることができるようにした。（図1）

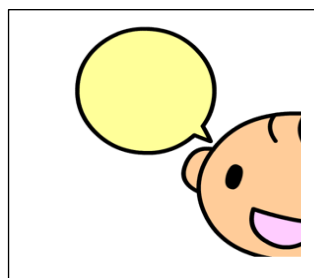


対象児の持ち物の写真



①言葉を写真と音声で確認
合わせてサインを確認

→



②音声模倣

→



③連絡帳を取りに行く

対象児：「れん・らく・ちょー」

《 図1：「れんらくちょう」の言葉の学習の流れ 》

②好きな活動の言葉を覚える学習 <5月中旬より>

- ・取り組み時間：生活の時間 休み時間 （身振り表現獲得まで可能な限り毎日）
- ・アプリ：写真

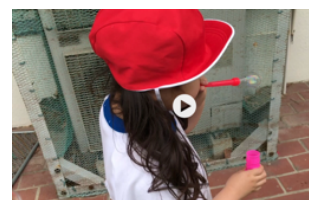
初めに、学校生活の中で対象児と共有できる好きな遊びや活動を見つけ、その活動を楽しむ対象児の短い動画を撮影しておいた。

例えば、「トランポリン」という言葉では、担任から「何をして遊ぶ？」と尋ねられ、トランポリンがある遊戯室の方向を指差しする対象児の表現に加え、「トランポリンで遊ぶ自分の動画」を見て、「トランポリン」という音声とサインを、担任を介して確かめるようにした。（図2）

対象児は他の活動についても、日々の要求を伝える場面で、以上のような担任からの働きかけに応じながら、即時的に音声模倣と動作模倣を繰り返した。



トランポリン



シャボン玉



おいかけっこ



おえかき

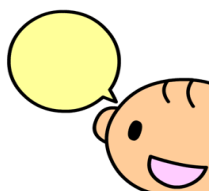
用意した動画4種（10秒程度の短いもの）



①言葉を写真と音声で確認
合わせてサインを確認



→



②音声模倣
対象児：「とらんぼりん」

→



③トランポリンで遊ぶ

《 図2：「トランポリン」の言葉の学習の流れ 》

③知っている語彙の音声を覚える活動（9月より）

・取り組み時間： 朝の学習 （可能な範囲で毎日3分～5分程度） ・アプリ：DropTalk

給食、運動会や発表会の題材となる動物やキャラクター、学校で使う道具等から言葉を選んだ。（右：写真）

学習では、写真やイラストをタップして流れる音声を聞き教師の言葉に合わせて1音ずつ音声模倣をした。また、サインを確かめた。（図3）



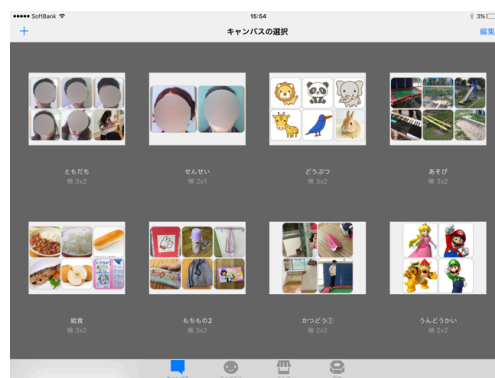
①イラストをタップ、音声を聞く

→



②音声とサインの模倣

《 図3：「ライオン」の言葉の学習の流れ 》



対象児童の身の回りにある物の写真や人物、イラスト画像と音声を VOCA に入れた教材

・アプリ：はじめてのひらがな 現在配信停止

12月から、言葉の学習にひらがなのマッチング活動を組み込んだ。対象児がすでに知っている語彙のイラスト、音声、文字が表示されるアプリを使い、これまで同様の音声模倣やサインの確認に加えて「一文字ずつのひらがなの音を聞きながら、選択肢から文字を選びマッチングする学習」に取り組んだ。

文字への興味が広がってきており、自分からアプリに取り組んだり、文字をなぞって書こうとしたりする様子が見られる。将来的に、文字をコミュニケーションに使っていくことが期待できる。



「ねこ」という単語と、「ね」と「こ」一文字ずつの音を聴きながらひらがなのマッチング。その後、言葉とサインの模倣をする

④友達・先生の名前を VOCA を使って呼ぶ活動（6月より）

・取り組み時間：朝の会（ほぼ毎日） ・アプリ：DropTalk



クラスの友達・担任を意識して、関わり方を変えている様子が見られた6月ごろから、名前を覚えるというねらいで VOCA を使った名前呼びの取り組みを始めた。取り組み始めは、担任が VOCA を使って名前を呼ぶ様子を2・3回見ることからスタートした。初めはタップがうまくいかなかったが、繰り返し工夫して音声を流せるようになった。

名前を呼ばれる友だちも VOCA で名前が呼ばれることを心待ちにした様子で、笑顔で返事や握手を返した。

また、3音以上の音の記憶の困難さから、特に仲の良い友達の名前を「□ーちゃん」と2音に近いあだ名で呼ぶようにしたことで、音声模倣ができるようになっていった。



使用した DropTalk のキャンパス

・対象児の事後の変化

①について

担任が「れ」と言いながら、連絡帳を示すサインを見せると、対象児は「れんらくちょー」と言葉で表現して、自ら連絡帳をカバンに片付けられるようになった。<7月以降>

他の言葉（タオル・水筒・はしなど）についても、同じようにサインと音声模倣ができるようになった。

②について

この取り組みを繰り返すと「何をして遊ぶ？」尋ねられた対象児が自らトランポリンのサインを返すようになってきた。また、「トランポリン」という言葉を担任と一緒に言おうとする様子が度々見られるようになった。（7月以降）

他の言葉については、「お絵かき」のことを「ぺん」という言葉で自発的に伝えたり、「おいかけっこ」のことをサインで伝えたりした。「ぺん」の言葉は、本児が「ぺん」が「お絵かき」を示すことを理解し、「ぺん」という言葉の音節が少なかったことから、本児の想起できる言葉に繋がったと思われる。



外遊び終了時、自ら次の遊びをトランポリンのサインで要求する

③について

単語の音節数が2～3音節の言葉をピックアップして取り組むようにした。特に、給食のメニュー（右：写真）や動物の名前などの学習に積極的だった。写真を見ながらサインで表現し、流れる音声を聞いて音声模倣することができるようになった。



焼き魚のイラストをタップし「さ・か・な」の言葉を模倣。サインをする

①②③を通して

対象児は、画像と共に、言葉やサインを繰り返し見聞きすることで、担任が話す言葉の最初の音を聞いて語尾を発声したり、音声模倣をしたりできるようになっていった。同時に、その中のいくつかの言葉やサインを、日常のコミュニケーション手段として使うようになっていった。

自発的にコミュニケーションに使う手段は「言葉」よりも「サイン」の方が多かったが、サインと言葉を組み合わせて使うなどしながら、担任に伝わる事柄が増えていった。

④について

一人一人の友達・先生の前に立って、一人一人の写真をタップして名前の音声を流し、ハイタッチをする、という「名前呼び」の活動ができるようになった。また、アプリの立ち上げや切り替えまで、担任が介入することなく自分で行うことができるようになった。

(11月後半)

名前呼びは「対象児のお仕事」という、クラスみんなのイメージができた。対象児自身も、自分から名前呼びの仕事に進んで取り組み、友達との名前呼びを通したやりとりを笑顔で楽しんだ。



積極的に名前呼びの係に取り組む

VOCA を使わないで名前呼びをすることを促してみたところ、対象児は iPad を指差して使うことを選択した。また、別の日に iPad が使えず、言葉での名前呼びに取り組んだところ、発音が難しく教師の介入が必要であった。以上のことから、現在、この活動では VOCA を使う必要性があることがわかった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

画像や VOCA を介した取り組みを通して、対象児が他者に伝えることができる事柄が広がったのではないかな。

・エビデンス(具体的数値など)

表1 < 対象児が自ら表現した事柄の内容と手段の変化 >

	主な表現の特徴	具体的な表現
5月頃	対人的な言葉が主 シンボルの選択 指差し	「うん」「やーや」「みてー」「かしてー」「やーや(嫌だ)」「おはよー」「たい(痛い)」等 提示されたシンボルを指差しして選択
7月頃	サインの増加	<u>お茶</u> <u>さかな</u> <u>トランポリン</u> <u>シャボン玉</u> <u>ちょうちょ</u> <u>ペン</u> <u>花</u> <u>はし</u> 等
12月 ～2月	サインの増加 2 語文表現の兆し 対人的な言葉以外の 発語	<u>くるま</u> <u>電車</u> <u>スクールバス</u> <u>鳥</u> <u>ライオン</u> <u>パンダ</u> <u>雨</u> <u>晴れ</u> <u>さんぽ</u> <u>図工</u> <u>頑張る</u> <u>着替え</u> <u>ハサミ</u> 等 ・「〇ーちゃん、ない」： 仲良しの友達がいない ・外を指差した後、 <u>雨のサイン</u> 、✕のサイン： 雨が降っていて外に行けない ・ <u>バスのサイン</u> の後、「ママ」： バスに乗ってママと帰る 「ペン・〇ーちゃん・パン・らー(デイスービス)・えー(遊戯室A)」

* 「 」内の単語は言葉、斜め文字 はサイン *模倣による表現は含まない *言葉、サインは1回表出した時点で記載

(表1より)「〇〇をしたい・欲しい」というような「要求」や、「スクールバスでママと帰る」というような予定、「外は雨だ」「〇〇ちゃんがない」というような状況などを、サインや言葉を組み合わせて伝えるようになった。また、2つの表現を組み合わせて2語文を表現するようになってきた。

・その他エピソード

①知りたい言葉を確認するための画像の検索

・取り組み時間：本児が指差して伝えた時 ・アプリ：Safari



対象児が、生活の中で見つけたイラストなどを、繰り返し指差しをして担任に伝えてきた時に、その言葉について検索した画像や音声を見て聞いて、言葉を確認する取り組みを行った。

このように、語彙を記憶しているが言葉にできない事物を見つけて「これ、知ってるよ」「これ、何？」という意味を含むと思われる指差しが、7月ごろから見られるようになってきている。



友達のTシャツのカブトムシのイラストを繰り返し指差しした対象児。検索した画像をしばらく見た後で、言葉を言ってみる

② 「コミュニケーションダイアリー」の作成

対象児の「言葉」や「サイン」を、誰でも見て聞いて分かり確かめられるように、サイン、音声模倣の言葉を、動画で撮影した「コミュニケーションダイアリー」を作成している。



「ティッシュ」(言葉の模倣)



「おべんとう」(言葉の模倣)



「きがえ」(サイン)



「スクールバス」(サイン)



「パンダ」(サイン)



「ハサミ」(サインと言葉の模倣)



「くるま」(サイン：ハンドルを回すように両手を動かす、言葉の模倣)

一番の視聴者を対象児自身と想定している。対象児が自分の表現を見て聞いて確かめ分かるように、動画に「該当する言葉のイラスト」と「ひらがな表記」を追記する予定である。対象児童以外の視聴対象には、保護者・他クラスの教員・デイサービスと、対象児童の生活に関わる人と想定している。